空なる我　　上巻

高口克則

私の神仏習合集大成です

はじめに

1、はじめに

「　空　」はエネルギーと考えると、お釈迦様への否定か？

お釈迦様は「　無我　」というものを説かれました。

私は「　空なる我　」です。

「　空　」を後述のように「　エネルギー　」と考えて、大乗仏教の「　一切皆空　」で、すべてのもの、「　神　」も「　仏　」もあらゆる存在が「　エネルギー　」として存在すると考えました。

これが、お釈迦様の「　無我　」と調和するかどうかですが、大乗仏教がお釈迦様の説と違う方向でしたら、私の考えはお釈迦様に反する考えでしょう。

ですが、私の独自な考えですが、「　無　」は「　ゼロ　」であり、それが「　空　」であるとは考えず、「　無　」は「　現象　」になっていない「　エネルギー　」で、いつ「　現象　」になってもおかしくない、眼に見える「　現象　」を否定する意味で、その力が「　エネルギー　」であれば、その「　エネルギー　」が「　空　」であると考えました。

「　無我　」とは、「　自我　」になっていない「　我　」というエネルギーで、それが宇宙（自然）エネルギー（神）と生命エネルギー（仏）が集まったもの（習合したもの）としまして、「　空なる我　」とし、その「　現象　」が「　自我　」であるとし、「　無我　」とは「　自我という現象を形成していないエネルギー　」であるとしました。

これが、私の「　空なる我　」という概念を作った趣旨ですので、それがどれほどまで効果があるものかを考えていきます。

第一章　空なる我

一章　「　空なる我　」

１、＜空なる我＞とは何

私は、「　自我　」を否定すると申しましても、（神仏）エネルギーとしての「　空なる我　」は否定しません。

「　空なる我　」とは、どのように考えるのかについて書きます。

私は、「　エネルギーは素粒子その他を結びつける力　」と考えまして、（Ｂ）の思想である「　空　」を「　エネルギー　」とし、仏教の言葉でありながら、大乗仏教の龍樹の考えに従わないように「　我　」についても、古代インドの考えではなく「　空　」つまり、「　（神仏）エネルギー　」の集合と考え（なぜなら、すべて空だから）、それが都合の良いように結びつけたものが心や気持ちなどの「　自我　」であり、この「　自我　」を固定した実体と考えずに、（神仏）エネルギーが進展する可能性を含むものと考え、それが生死という形を問わず、続くものだと考えています（エネルギー保存の原則）。

自分の目の前には脳内錯誤した世界であるとしても、「　生きるため　」には呼吸が必要であるように、脳内錯誤しているのが生命エネルギー（仏）であれば生命維持のためには、空気という宇宙（自然）エネルギー（神）を必須とするものだと思います。

上記の考えを進めて、「　死　」とは、生命エネルギーの終焉とするべきで、宇宙（自然）エネルギーは宇宙に回帰し（エネルギー保存の原則）、その後、条件が整えば、また別の生命エネルギー結びつくと考えますと、「　輪廻　」の思想も理解できます。

人間が「（神仏）エネルギーのひとつの現象　」としての自然物であれば、動植物はもちろん台風などの、あらゆる現象を含むように考えるべきで、プラズマ宇宙論のフィラメント構造やビルケランド電流などの考えも包摂するように考えるべきだと思います。

私には、とてもそんな考えは思い付きませんが、仏教で「　三身　」を「　法身・報身・応身　」とする概念がありまして、その解釈は、仏教典に従うべきでしょうが、私は、法身は宇宙、報身は思想、応身は変化する人体と解釈しています。（これは、ご自身で検討してください）

この世は、すべて「　空　」であれば、すべて「　エネルギー　」であり、この「　三身　」もエネルギーであり、それだからこそ、応身たる人体が新陳代謝して絶えず細胞を入れ替え、法身は拡大とか縮小するだろうし、報身も、その思考自体がエネルギーであるから、体系を破壊し新たな概念を生むだろうし、「　死　」は頭脳の産物である「　無　」になることではなく、「　生きる身体　」という形は消えても、それまでの人体を構成していた宇宙（自然）エネルギーは回帰して「　有　」であり、それだからこそ、万物は固定した因果関係で終わることはなく、絶え間ない因果の世界（Ａ）という思想が活き、「　無常　」や「　希望　」といった概念も活きるし、（Ｂ）の思想も活きると思います。

現在の私の考えは、「　法身・報身　」に合一する「　応身　」であれば良いと思っています。

２、＜私の視座＞

私は、これまで、仏教で言われる「　一切皆空　」の考えのもと、（A)　顕教の考え（唯識）・「　縁起縁滅　」と(B) 密教の考え（色即是空　空想是色）をもって臨み、「　一切皆空　」により「　自我　」も「　空（kuu）」としました。

ただ、私の場合、仏教と大きく異なり「　空（kuu）」を「　エネルギー　」としまして、そのエネルギーは空気などの宇宙（自然）エネルギーとＤＮＡの力などの生命エネルギーとし、前者は宇宙の創造者たるエネルギーですから「　神　」とし、後者は生命の創造者たるエネルギーとして、「　仏　」としました。

その二つの集合を神仏習合している人体（精神を持つ霊体）として、二つのエネルギーが混在しているがゆえに「　死中生あり生中生なし　」の新陳代謝の世界に住し、外界の「　色即是空　空即是色　」の世界に対応していると思います。

現在は、超弦理論やホログラフィック宇宙論が流行しているようですが、以前に申しましたように、客観性や評判は人間思考のためであり、人間の思考そのものが神の考えとは違うかもしれませんので、それは「　真実とは限らない　」し、「空（kuu）」を「　空虚　」とか「　からっぽ　」などと考えれば、この世は夢であるとなって、自殺、テロ、虚無主義、無情というような思想に導かれるから、そうではなく、「　ホルグラフィック　」に目で見える事も「　エネルギー　」によりますから、「　エントロピー　」は「　エネルギー　」に関係する概念でしょうから、その「　変化　」する「　エネルギー　」とは何か、「　色即是空　空即是色　」をこの宇宙論でどのように説明するのか？が判明しないのなら、この理論は、最新の科学者が主張するのですから真実かも知れませんが、「　道義的　」に採用することはできません。

なぜなら、私の考え上に「　無常　」や「　希望　」や「　変化　」という概念が活きるからです。

「　一切皆空　」により人間も自然物と同様に「　空　」ですが、私の「　空　」は「　エネルギー　」ですから、人間はそのエネルギーを生殖という行為によって「　エネルギー・力　」を継承しているのだと思います。

母親の体内には「　エネルギー　」が宿るもので、「　我　」がその「　エネルギー　」であり生存するために生命エネルギーの力により、台風や太陽系ができるように「　我　」のまわりに、自分の都合のよく合理的で客観的な思想や養分を他の動植物の生命を奪って「　自分　」のものにして、「　自我　」を作ると思います。

それは、（A)の唯識を見ればわかりますし、それが（B)の思想により、「　一切皆空　」であるからこそ、「　変化　」が生まれ、「　空　」即ち「　エネルギー　」であるからこそ、「　変化　」し、それを「　縁起縁滅　」と因果で自分のために獲得した「　可能性　」が、更なる因果を生んで、自分のための固定した「　可能性　」は否定されることになり、「　自我　」という偶像は捨てることになります。

その「　可能性　」は静止したものではなく絶えず変動しますから、無意識のなかで気配を感じ取って、偶像になっている「　自我　」と比較して「　不安　」になったり「　安心　」したりという「　自我　」を変動させると考えます。

それは、「　神　」を一夜にして感じ取って永遠の安心を得ることも出来るでしょうから、ブッダやキリストのように一夜にして「　悟る　」ことも出来るかも知れません。

3、＜空なる我としての私の進路＞

当然「　進路　」も「　空　」でして、それは因果の法則やエネルギー保存の法則など、この世の法則のように、「　空なる我　」が持っている「　エネルギー　」の分散や解消の仕方（道）であると思います。

「　一切皆空　」で、自然物が皆「空」であり、変化するならば、自分の「　我　」も「　空　」であり、その時々の自分が、「　そのエネルギーのひとつの現象　」として、捉え「　自我　」を偶像のように固定せず、生死の形を問わず、「　エネルギーの宇宙への回帰　」を信じて、その「　回帰　」の方向に自分を進めることが「　生きること　」であり、「　死　」という形をして人体は消滅しても、宇宙（自然）エネルギーとなって、宇宙（自然）エネルギーの変化とともに「　生きている　」ことを希望することが、「　死後に生きること　」だと思います。

それまでは、他の動植物の命をありがたく頂いて食前の「　いただきます　」と食後の「　ごちそうさま　」という命を頂いた感謝のお礼と、これからこの命を自分の命に替えて、自分もまた自然の回帰すると考えて生きようと思いますし、「　散る桜　残る桜も　散る桜　」で、ＤＮＡにより障害を持とうが健常者であろうが、日本人であろうが外人であるが、頭脳明晰であろうが劣等生であろうが、美人であろうがなかろうが、「　エネルギーのひとつの現象　」であることには変わりなく、みんな孤独で、世界でたったひとりの自分だけの人生を歩んで、「　人類の多様性　」を示さなければならないという神（宇宙エネルギー）が課した任務があると思います。

バラの花が「　私は美しいでしょう　」とかトンボやセミが短命を嘆かないように、お金持ちの人生が貧乏の人の人生を劣ったものとすべきではありません。

お金持ちになることが自分の道だと限りませんし、バラやトンボやセミのように、生きることが自分の道を進むことで、たとえ貧乏であっても、幸福かも知れません。

お金持ちが貧乏な人より幸福と思う人は、そんな幸福が至上の幸福だと思っているかもしれませんが、その幸福も「　死んだら終わり　」です。

「　あら楽し　おもいははるる　身は捨つる　浮世の月に　かかる雲なし　」と死に際に歌った、大石内蔵助の幸福などわかりもしない人であるかも知れません。

負け惜しみになりますが、自分の境遇を嘆かないで、自分なりの人生を自然と共に生きてゆくことが、「　宇宙（自然）エネルギーの回帰　」の方向に進むことで、それが、安倍首相がいった、日本人のひとりひとりが自分の花を咲かせることだと思うのです。

これは、私の進路に対する考えですので、一般的には、以前に亡くなられたアップルの創始者である、スティーブ・ジョブズ氏の演説が参考になると思います。

第二章　「　空なる我　」への道

空なる我への道

「　自我　」は、神仏エネルギーの混合である「　空なる我　」が生存のために集積した自分のための可能性を無意識な「　能力　」として蓄えたエネルギーであり、この齢になって全てを放棄しなさいと言うのではありません。

煩悩によって集積したものですから、多くの物を捨てることになるかも知れませんが、「　可能性を集積する力　」は、「　空なる我　」が、他の自然物が諸物を集合し結合して「　形　」を作るエネルギーと同じく人間に与えられているエネルギーとして残り（自然エネルギー）、生存するためのエネルギーは生命エネルギーとして、人間に与えられた様式に沿って使うことが条件で残ると考えます。

「　自我　」を捨てて「　空なる我　」になるのですから、自分の為を捨てて人間一般の為に置き換え、自分がこれまで生きて来て得た「　可能性　」という能力（エネルギー）を人間一般の「　可能性　」として、自分から離れて、人類進歩の為に「　可能性を活かす　」ことが、自然エネルギーと付与された生命エネルギーに戻ることになるかと思います。

「　自我　」を捨てることは、「　可能性　」を放棄するのではなく、人類進歩のために「　可能性　」というエネルギーを使うことで、才能ある人がノーベル賞を受けられるのは、自我から離れて「　空なる我　」になって社会に還元したことだと思います。

勿論、ノーベル賞は貰えませんが、趣味といえない趣味があるように、自分が「　空なる我　」をもって、自分のエネルギーを人類のために使うなら、生命エネルギーを司る「　仏　」の立場からは、同等であると思います。

人類の為というのは、「　創造　」にエネルギーを使うことだと思います。

客観的な評価に捉われずに、当時の「　合理性　」を疑って一見して不合理とも思われることでも、その方向を貫くことだと思います。

「　方向　」は精神の問題で、いづれ間違いが後世になってなされるでしょうから、間違ったことを言わない自分であるため何も言わないではなく、間違っているかも知れないが「　自分の信じる道を行く　」ことが肝要かと思います。

勝負では、「　勝つと思うな、思えば負けよ　」といいます。

将棋なら、「　勝ち　」や「　負け　」に拘らず、自分が考えた最善の手を指して、「　負けた　」としても、「　その手では負ける　」と示すことで、人のためになるかと思います。

菊の花がバラにはなれないように、アヒルが白鳥になれないように、人間も皆、自然界にはＤＮＡがあり、自然界から見れば生物として同等で優劣はなく、世間でいうノーベル賞を貰えないけれど、人類進歩に役立ったならば、人間として生きるべき「　仏の世界（生命エネルギー）　」から見れば、「　空なる我　」になれたことになるから、ノーベル賞の受賞者と同等に扱われると思います。

自分のＤＮＡに従って、自分のためという観点を捨てて、自分の能力に「　可能　」なかぎりを尽くすべきだと思います。

それが、「　空なる我　」の持つエネルギーをエネルギーに無理しないように、解消させ、発散させることで、進路の方向は正しいと思います。

私は、「　一切皆空　」に従って、私という自我も「　空　」であり、その「　空　」とは、自然エネルギー（神）と生命エネルギー（仏）の習合で、自然界にあるように「　形　」を作る働きがそのエネルギーであり、「　自我　」というのは、その時どきまでに、自分の生命維持のために「　可能性　」を集合させて無意識に「　からだ　」を動かす能力となっていて、そのエネルギーが自分のＤＮＡなりの変化して現れた「　形　」だと思っています。

自然界での自分の存在感が「　気持ち　」や「　心　」で、それが「　自我　」であると思っていますから、今、自分が感じている気持ちは、神仏エネルギーが自分の煩悩に応じて「　形　」を作ったものを感じていることで、それは自然界と同じような「　現象　」を感じることであり、自分も他の自然界の動物も同じ「　エネルギーのひとつの現象　」として捉えるべきです。

その「　自我　」を「　空なる我　」にすることは、自分の存在を全否定するのではなく、「　自分のため　」という方向を「　人類一般のため　」と変えて、今、持っている可能性を、間違いに拘らずに、人間進化のために「　創造　」することが「　空なる我　」になることだと思います。

それが、無駄なエネルギーの解消、発散を放棄によって為すことにより「　空なる我　」になることだと思います。

無論、禅などを実施する仏教の立場ではなく、人間を「　エネルギーのひとつの現象　」と捉えて人間進化を目指すことは、仏教のいう人格の完成を目指すものではないですが、禅で真理を悟ったとしてもその後はどうするのかという進路の問題に突き当たりますから、真理を悟っていなくても、放棄によってエネルギーの発散を図る方向は正しいので、神仏には同等に見えると思います。

人は人間の生きる多様性を示すためにＤＮＡを違えて作られていると思い、現在の自分は、自然界と同じく「　エネルギーのひとつの現象　」と捉えるなら、セミやトンボやクマや馬や犬や猫のように、エネルギーが尽きるまで、一所懸命に生きて死なねばならないのが生物を創った創造主の意図であるだろうし、「　自殺　」するのが人間だけというのは、人間の欠点であり、誇るべき考えでないことは明白です。

「　どうして死んではいけないの　」というのは、犬や猫のようにエネルギーが尽きるまで生きなくてはならないのが、命を持つ生物の生き方であり、「　自殺したら犬や猫に叱られますよ。一所懸命に生きましょう　」というべきでしょう。

「　私は無神論者だ　」という人には「　あなたのなかで生きている神様（エネルギー）が泣きますよ　」とでもいうべきでしょうか。

「　無　」がエネルギーの世界であれば、この世は全て「　無　」であることになりますが、同時に、全てがエネルギーに満ちているとも言えます。

虚無論は「　一切皆空　」の考えとコインの裏表のように、有無の裏表であるかも知れません。

私は、「　空なる我　」としますから、虚無論ではないつもりです。

私のようなＤＮＡを持つ者にとって、「　人間の進化　」に役立つことができるのかを考えますと、今まで、偉人たちが疑問や嘆きとして残した文句や、昔から受け継がれている難解な文章に、自分なりの解釈を与えることぐらいしか思いつきません。

私は「　無我　」というのを、「　一切皆空　」に従って「　空なる我　」と考え、それを実体の無いもので「　からっぽ　」ではなく、自然エネルギーと生命エネルギーの習合と考えることによって、一切を「　エネルギーのひとつの現象　」と捉え、その発展した「　形　」を「　自我　」としましたので、「　形　」を変えてもエネルギーは消滅しないならば、「　自我　」という「　形　」を自分をはずした「　形　」に変えることで、「　無我　」の枠を持たない「　形　」のエネルギーとなることを書きました。

ここから、おのずと「　生きる意味　」や「　自殺の意味　」もわかると思います。

私は、「　空なる我　」は、自然エネルギーと生命エネルギーの習合として、「　一切皆空　」に従って「　自我　」という実体ではなく、ちょうど台風のように、どこに中心があるのか知らないが「　空なる我　」の周りに「　煩悩　」によって「　心　」や「　気持ち　」を作りそれを「　自我　」だと思っています。

仮に、ある株式投資をしていて株を持っているとき、その株自体を自分の煩悩で集めて、その株式の価値が市場で上下して、自分の懐と比べて不安になるように、無常に変動し、「　心　」が安らぐことはなく、手放したら安心するようにいつも自分に不安をいだいています。

煩悩自体は、「　欲　」でして、生命のエネルギーだと思いますから、煩悩を滅却することが「　即身成仏　」になるとは考えずに、煩悩の捉われて不安になったり喜んだりと、煩悩に左右されるのが、「　汚れ　」だと思いまして、「　空なる我　」は、引力のように引き付けたり離したりする力（エネルギー）であり清廉なもので、引き寄せる物が煩悩で偏っているため、地球上がゴミで汚れるように、煩悩が表面を汚しているから、それを捨てて、「　引力そのもの　」になろうというのが「　空なる我　」になることだと思います。

生きているゆえに、本能とも言うべき曇った煩悩を必要としますが、ハスの花が汚泥から首を伸ばして咲くように、本能（煩悩）の中から「　知　」という華を咲かせるのだと思います。

私は、般若心経しかお経は知りませんが、「　空（kuu）」が、仏教の根底にあって、自分を、自然界のエネルギーのひとつの現象だと考えることによって、「　慈悲　」も生まれ、そのための修行段階として、各宗派の戒律があるのであって、目指すところは「　空（kuu)」を実感することではなかろうかと思います。

戒律を守っておけば涅槃に到達するのではなく、「　空　」を知り、「自分」と同じ「　現象　」である他人のすべての悲しみを我が身の悲しみとして引き受け、悲しむ人に「　慈悲　」を行う僧侶こそ「　即身成仏　」した人だというのではなかろうかと思います。

仏の教えを受けた、そんな人が現れることを切に願っています。

（i）＜空なる我になること＞

私は、これまでに「　一切皆空　」のもと、お釈迦様が言う「　無我　」も、上記（１、はじめに）のような私の思考の延長で「　空なる我　」と考えました。

私は、仏教と申しましても「　般若心経　」の短い文章を唱え、その意味を自分勝手に解釈しまして、「　空（kuu）」が「　実体がないこと　」だとしましたら、我が国の法律で電気が財物か迷ったすえに財物としたように、もし、「　実体がない　」とは定義は出来ないことならば、定義することは出来なくても存在するものがあるということならば、つまり生命エネルギーのそとに何か不明な自然エネルギーがあると考えれば、「　空（kuu)」は「　（神仏）エネルギー　」でなかろうか？という考えになり、「　空　」を「　エネルギー　」としました。

これは、明らかに｛　Ｅ＝ＭＣ²　｝というアインシュタイン氏の考えを頂戴したもので、他のブログにも書いてありますように、古代の釈迦たちの考えには、現代物理学の像が見えていたのだが、｛　Ｅ＝ＭＣ²　｝を知らずこれを「　空（kuu）」としたもので、その智慧に辿り着くまでは古代では呪文を唱えて心を統一するしかなかったのだと思います。

私は、大乗仏教の龍樹の教えの本は読んでおらず、私の考えは仏教からは到底、認められないと思いますが、「　空（kuu）」とは、知識で理解するようなものではなく、「　からだ　」で感じるもので、ちょうど重力を自分の危険度で現すように、感じるものなのだと思いますので、例え龍樹が持っていた知識がなくても「　空　」を知ることが出来ると思います。

先ほど述べましたように、「　無我　」は「　空なる我　」で、「　（神仏）エネルギー　」の習合が「　我　」だとしまして、重力のようなものだと考えますので、それは無意識なら「　人格　」の完成でしょうし、本来はイメージが不可能な「　仏　」を昔の人が「　後光　」を像の背後に書いているのは、仏も「　空　」であり「　エネルギー　」であることを感じているんだと思います。

私は、人が持つ「　魅力　」というのも、そのエネルギーの現れではないかと思っています。

エネルギーは知識から得られるものではなく、感じるものだということは、極端にいえば「　心　」や「　気持ち　」を持つ暇もなく、偶像も作れないことであり、「　将棋は格闘技　」で書きましたように「　石火の気　」という武道にも通じることだと思います。

この考えは、あくまで現代の考えであって、今現在、客観的であり合理的であることは、「空」でもわかりますように「不合理　」も含むのが「　真実　」だと思いますので、いづれ歴史により淘汰されるのだと思いますが、現代で、世界はホログラフという主張に対しては、そのホログラフだと見ることも、エントロピーも「　エネルギー　」に関するものですから、私にとりましては、その「　エネルギー　」の解釈によって、採択を決めたいと思います。

話は戻りますが、般若心経に書かれている「　無　」や「　不　」の解釈により、釈迦はまた違った世界観を持っていたのかも知れません。

お釈迦様は「　無我　」としましたからそこには違った意味があるかも知れず、僧侶の考えを聴かなくてはなりませんが、私は「　無　」は人類が経験したのではなく思考上の産物だとしましたが、「　無　」が「　０（ゼロ）」であり限りないエネルギーを持ち、「無（ゼロ）」という世界は対消滅する完全均等なる異次元の世界であるとすれば、またこれも私の考えは間違いであるのかも知れません。

そこまで考えての「　無　」とはせず、単なる否定の意味で、「　無我　」とは「　我　」を否定するものであるかとも考えましたが、一方では「　唯我独尊　」とまでいわれていますから、「　我　」をまったく否定するのではなく「　自然エネルギーと生命エネルギーの習合　」を考えて「　空なる我　」とし、自分の偶像が「　自我　」であり、その偶像を否定する意味で「　無我　」といわれているのだと考えています。

このように「　我　」を「　空なる我　」とし、自然物が自己を形成するエネルギーがあるように、人間にも人間を形成するエネルギーが「　我　」であり、これらはエネルギーとしては、自然物と同等のエネルギーであり、醜い動物はおのれが持つＤＮＡにより人間の眼には醜くみえるのを自分ではどうすることもできませんが、人間は意識で、容貌を変えることが出来ますが、エネルギー（神仏）から見れば、醜い動物もどんな容姿や思想を持った人間も同等であり、ただ授かった命を「　自殺　」という「　形　」で形だけ変えてしまう人間は、神仏から見れば、真摯に生きる動物より劣った生き物に映るかも知れません。

作家などの知識人が「　自殺　」する場合が多いのですが、自分を「　空なる我　」として捉えて、自我は「　（神仏）エネルギーのひとつの現象　」に過ぎず、他人も同じ「　現象　」であると考えると、他人の悲しみを自分の悲しみといて捉えて「　慈悲　」の「　心　」が起こるのではないか、原爆被害に苦しんだり地震災害に苦しむ人を「　あざわらう　」ことなど、当然、出来るはずもなく、知識人であれば、その知識を活かして「　救済　」にまわるべきではないかと思います。

「　自殺　」する人も、原爆や災害に苦しむ人の苦しみなど無頓着、あるいは「　あざわらう人　」と同等であり、自分の容姿だけ「　形　」だけ、あるいは「　自我　」だけしか考えない人であり、ウシやウマやブタやトンボやカやハエや草花が生きている姿見習って「　人生　」をやり直すことが必要ですから、例え「　自殺　」で「　形　」を変えたとしても（神仏）エネルギーは残りますから、人類は幸福にはなれないだろうと思います。

私は、このように「　空（kuu）」の自覚が、仏教の根本にあると思います。

これは、これまで書いてきた（Ａ）の思想も（Ｂ）の思想も、共に生きるには必要であり、宗派に分かれて主張されるのには疑問に思っています。

また、「　空（kuu）」を、「　からっぽ　」や「　空虚　」などという意味にして、この世は夢やバーチャルだと思うと、「　希望　」や「　変化　」や「　無常　」というエネルギーを生む考えとは反対に、「　絶望　」や「　あきらめ　」や「　虚無主義　」や「　自殺　」を肯定する考えや生き方になってしまうのではないかと思いますから、ホログラフィック宇宙が正しいかも知れませんが、先ほど申しましたように「　真実　」とは言い難いので、現在の私は、この考えは採用しません。

「　空（kuu）」をどのように解釈するかで、考え方や生き方の進路に大きな違いを見せると思いますから、素人の私としては、仏教の始めに般若心経の「　空（kuu）」の解釈から説明してもらえば、古代の人からもっと、人間が進化するための多くの疑問が湧くと思います。

（ⅱ）再考、無我と空なる我の違い

私は、前回で「　無我　」を「　空なる我　」として考えますが、根本的に仏教とは違う考えではないだろうかと思います。

「　無我　」は因果の法則に従って「　現象　」するが、「　空なる我　」は、「　自我　」を現象として否定するだけでなく、因果の法則をも「　現象　」として否定（不変の法則は無いと）するからです。

仏教は、宇宙（自然）エネルギーを「　因果　」として考えて、その方向への人の救済の理論かと思いますが、私には、その「　因果　」という考え自体が生命エネルギーが生み出した煩悩ともいうべき「　現象　」であり、その「　因果　」を考えることは、既に「　自我　」の範囲に留まっていて、生命エネルギーから出た煩悩が、本来は清浄であるエネルギー全体を汚し、宇宙（自然）エネルギーの中の生命エネルギーは清浄ではあるが、動物の「　本能　」という無明と私には思われるものを含んだエネルギーに化し、般若心経でいう「　空（kuu）」という意識で否定することにより清浄を取り戻せるものだと思っています。

人間の他の動物も、意識でないにしても宇宙（自然）エネルギーを「　因果　」と捉えて行動するもので、人間も同じという考えもありますが、それは本能のまま行動することと同じであり、せっかく「　空（kuu）」は「　エネルギー　」であると意識できたのですから、古来の「　魂　」というのを（神仏）エネルギーの習合であるけれど、それは「　生命一般の生きる事　」だとして、特定の「　魂　」ではなく生命体一般に共通する「　命　」だとし、動物はＤＮＡのため本能の煩悩のまま暴走するのが「　穢れのない命　」の行動であるかも知れませんが、「　空（kuu）」を知った人間が「　穢れのない命　」に従った行動というのは、仏教の「　慈悲　」というか、他人を自分と同じ「　エネルギーの現象　」として、相手を突き放した「　憐憫　」の「　気持ち　」や「　心　」をだくことなく、相手と同時に痛みを共に感じ、喜びを共にするのが「　空なる我　」になることであり、苦しむ人に財物を与えることや道理を教える「　布施　」というのもそれを現す行為だろうと思います。

ですから、なぜ「　布施　」をするかは、目の前の可哀そうな僧侶への寄付でもありますが、同時に私の「　魂　」の浄化であるとも考えていて、私は災害に対する義援金などの財物給付も、目的の第一としては苦しむ人のためでもありますが、自分の「　魂　」の浄化でもあると考えています。

これは、その行為の「　因果　」により、更なる自分の幸福への道ではなく、因果律には従わない幸福だと思っています。

それは、親の子への無償の愛のように「　見返り　」を求めるのではなく、自分が蓄積して来た自分の「　可能性　」を相手に与えることによって、自分の「　魂　」あるいは「　生命一般　」を清浄に戻すもので、それを「　幸福　」と捉えるなら、生きる自分が「　因果　」によっての「　幸福　」と同じ名前の別物を獲得することだと思います。

生命エネルギーは、その維持のために「　現象　」を形成しますが、それを否定する方向（放棄の方向）に向かう考えが「　空なる我　」のなかにあり、その幸福は何か？を考えまして、放棄が「　空なる我　」になることを意味し、自分の持つ自我を放棄して「　幸福　」と考えるからです。

別物といいますのは、もしも相手が遺恨を残して死んだ主君で、その人から育てられた自分の生命をかけることによって、相手の「　苦抜楽与　」が可能なら、主君の遺恨をはらすために討ち入りをした大石内蔵助の辞世の句である「　あら楽し　おもいははるる　身はすつる　浮世の月に　かかる雲なし　」と同じ幸福なのではなかろうかと思います。

しかし、五感の感覚や頭脳の働きが鈍って「　死　」へ到達するのですが、この喪失してゆくのは自然が「　空なる我　」に戻ることを援助していると思うならば、その喪失してゆく姿が「　悟りの道　」を歩んでいるとも思われ、「　死　」にも感謝すべきかも知れません。

（ⅲ）道は自然の法則に任せること

私が、これまで「　一切皆空　」という大乗仏教の教えから、唐突に「　空なる我　」を導きだしたように思われるかも知れませんが、これは、私の規定路線でもあるのです。

「　無我　」を「　空なる我　」としましたのは、「　自我　」を否定するべきですが、「　自分　」を考えてみますと、私の思考は頭脳という生命エネルギーの働きだろうし、「　からだ　」を形成するのは宇宙（自然）の素粒子を他の自然物と同様にＤＮＡのもとに結合、あるいは結集した細胞の集まりでしょうしそれは宇宙（自然）エネルギーの産物だと思います。

その細胞が、絶えず新陳代謝を繰り返して新たな細胞を補充しているのは、「　万物は流転する　」自然物と同様であって、自分の「からだ　」を幾ら細分化しても、また自然物を幾ら細分化しても、結局はその素粒子を結合させているエネルギーに行き着くと思います。

私は、これを「　色即是空　」と考えて、「　色　」は「　からだ　」で「　空　」は「　エネルギー　」で、宇宙（自然）エネルギーと生命エネルギーであるとしました。

また、宇宙（自然）エネルギーや生命エネルギー（空）は、「　生物　」と認識される物（色）という「　エネルギーが現象となった姿　」によって人間に示されますので、これを「　空即是色　」としました。

それは、アインシュタイン氏の、｛　Ｅ＝ＭＣ²　｝の考えを頂戴したもので、同氏に深く感謝をいたします。

私が「　空なる我　」としましたのは、「　色即是空　空即是色　」から導きだしたもので、それが「　一切皆空　」に一般化することによって、自分を含む自然物が変化するのは、「　空（kuu)」というエネルギーが変わるからだとしまして、私の「　からだ　」や「　思考　」が、その時々に変化するのは、自分が、何処かにエネルギーを持っているからであり、他人の「　からだ　」や「　思考　」、その他の自然物も自分と同様のエネルギーを持っているから「　形　」を変えられるのであり、変化後の「　自我　」は、そのエネルギーの結集の結果であり、そのエネルギーは「　死　」という「　形　」で終わるけれども、そのエネルギーは宇宙（自然）のエネルギーや生命のエネルギーの発生源に戻るだろうと考えました。

もしかしたら、「　自殺　」する人は、その場所が好みで、死後もそこに留まりたいから、あるいはその場から逃れようとして、その状況で「　自殺　」するかも知れませんが、それは本来、戻るべき所の戻っていないのであり、「　魂　」の循環が乱れることになるかも知れません。

たとえ、生まれ変わってもその状況に再び陥るか、別の生物に生まれ変わって、その責任を負うかも知れません。

人間は「　呼吸　」して、宇宙（自然）エネルギーを取り入れ、あるいは熱を自然界と交流させることによって生存するように、生命エネルギーは宇宙（自然）エネルギーの庇護の元に成り立つのであり、神（自然エネルギー）の前では平等でＤＮＡにより生命エネルギーによって人間にとっての優劣がつくかも知れませんが、神の前では平等であり、お互いに神仏エネルギーの習合という点では同等のものだと思います。

仏教の「　縁起縁滅　」という考えも、生命エネルギーがある限り、人類が生存する限り妥当するだろうし、それは「　思想　」ですからキリスト教のいうように人類滅亡しても天体の動きは人類の滅亡には影響なく宇宙（自然）エネルギーで変化し続けるでしょうが、人間が考えた「　時間　」や「　空間　」という「　枠　」はなくなり、エネルギーという「　無明　」の世界に入ってゆくのだろうと思います。

日本の空海という僧侶やゴーギャンが、どこから生まれて死んでどこにゆくだろうかと問いましたが、私は人類の行き末と同じく「　エネルギー　」という「　無明　」の世界に行くだろうし、生命エネルギーは「　本能　」というエネルギーとなって、仏教がいう輪廻転生する「　無明　」の世界にゆくかも知れません。

なにせ、人間は「　エネルギーの一つの現象　」に過ぎませんから、自分が死んでも人類が滅亡するときと同様に、エネルギーに戻るだけだと思います（無無明尽）。

（iv）空と無の違い

私は、「　無　」というのは人間が思考の産物で、人類はこの「　無　」を経験したことがなく、「　空　」を「　無　」と混同すべきでないと思っています。

これまで書いて来ましたように、「　空　」はエネルギーとし、宇宙（自然）エネルギーと生命エネルギーの習合が「　空なる我　」としました。

「　一切皆空　」ですから、「　神　」も「　仏　」も「　空　」であり、前者が宇宙（自然）エネルギーであり後者が生命エネルギーであることは、これまで書いて来た通りです。

では「　無　」をどう考えるのでしょう？

「　無　」は「　ゼロ　」であり、そこから有限数が考えれるのですが、私は無論数学者ではなく、文系のマルクス主義を是とする大学の法学部出身で、まったく数字に弱いのですが、こうなった以上は「　無　」や「　ゼロ　」について空想したいと思います。

「　人生　」は暗闇から舞台に上がったようなものだと言う人もいますが、私は「　人生　」は有限数のようなもので、「　無　」から始まり「　無限　」の中に沈んでゆくものと考えるのですが、思考上の何も存在しない「　無　」から「　無限　」になるのではなく、エネルギーである「　空　」として循環するものだと考えています。

「　無　」や「　ゼロ　」は人間の思考の産物であり、「　空　」即ち「　エネルギー　」が「　現象　」として現れるのが理解できるように可視化したのが数字だと思っています。

「　自我　」が「　空なる我　」が「　現象　」として現れるように、自然の諸物も同様に「　エネルギーのひとつの現象　」として、私から認識されるのだと思います。

その「　現象　」を「　ひとつ、ふたつ、みっつつ……」と数ぞえるのですが、何時だったのかの記憶は無いのですが、ＴＶなどで未開の人たちは、ある数を数えてそれ以上は「　わからない　」という話を聞いたという覚えがあります。

この「　わからない　」というのが「　無　」であり「　数　」の始めの「　ゼロ　」がこれを現しているとのことだと思いますが、「　わからない　」のは、「　何もないから数えられない　」とは見えないものを否定するのではなく現象の「　形　」がないことだと思いますが、現象が「　数えきれないほどある　」から「　わからない　」、つまり「　無　」と「　無限　」は、「　わからない　」という点では同じなのかも知れません。

「　無　」や「　ゼロ　」は「　無限　」とは違って「　数えきれない　」のではなく「　何も存在しないこと　」だとは思いますが、ヒッグス粒子や南部氏の対称性の崩れなどにもあるように、「　完全な対称状態　」がスピンや何かの都合で他の物体と結合した結果で粒子が現れるように「　ゼロ　」とはエネルギーが「　完全な対称状態　」の存在で、つまり「　無明　」の状態で認識されないエネルギーが均衡した状態だから「　数えられない　」とか「　わからない　」ので、「　無　」といったり「　無限　」というのかも知れません。

実際、「　誕生　」のことを考えてみますと、父親の精子が持つ生命エネルギーと母親の卵子が持つ生命エネルギーが、母親の排卵期の状態で、大量の精子とひとつの卵子が結び付き、互いのエネルギーが通じ合って、胎児という現象になるのですから、誕生前の父親と母親の中での「　数えられなく　」「わからない　」つまりエネルギーの段階から、それぞれのエネルギーの現象が結合して、「　ひとつ、ふたつ　」と数ぞえられる胎児としての「　存在　」になると思います。

その誕生前までは、「　何も存在していない　」のではなく、父親と母親の体内の中には、生命エネルギーが「　数えられない状態　」で存在しますが、その「　現象　」である精子と卵子が結合して「　無　」を現す「　ゼロ　」から、胎児という「　現象　」を発生させ、それが生命エネルギーの終焉である「　死　」で、「　数えられない　」宇宙（自然）エネルギーに戻るのですから、誕生から死までの「　人生　」が終わっても、認識されない数えられないエネルギーの状態として「　有る　」のであって、思考された「　無　」は、人間が見る「　形　」だけに過ぎず、「　形　」を変えて「　無限のエネルギー　」として残ることを否定しないのだろうと思います。

「　無　」とは「　対消滅して完全均等として隠されている無限のエネルギーの存在　」で、認識不能な「　空　」であるが便宜上理解可能な「　形　」の「　ゼロ　」として、「　存在しないもの　」としているのではないかと、私は思っています。

ですから、密教の真言宗では、困難に直面したとき、弘法大師さまの名前を唱えれば、何もない虚空から直ちに現れてくださると信じているのではないでしょうか。

私は、こうして「　無　」や「　ゼロ　」は「　無限　」と同義で、「　数えられないこと　」であり、エネルギー（神）の「　完全なる対称　」から、珍しく外れた物体が「　人間　」であり、人間が尊いと思うのは、精神があるのではなく他の動物も尊いと思うのと同様に、神（エネルギー）の「　完全なる対称状態　」から、偶々、はずれて、数えられる存在になったことを喜ぶことであり、それは宗教的には「　神から離れた物体　」として、あり得ない事が起こったことで、神（エネルギー）からしては想定外のことで、「　対称状態　」に戻ること、即ち「　対称性　」を含んだ合理的な考えが、近年に言われる「　神の数式　」でしょうが、微細なエネルギーの対称性を漏らしている可能性もあるので「　完全な対称状態　」にならなく「　真実　」ではないのかも知れません。

「　すべてがわからない　」という状態は、単なる「　無知　」ではなく、考えた末、「　すべてが対消滅する　」ことになるという結論になるのかも知れません。

「　神の数式　」が、数々の「　対称性　」を取り入れられるのは、まだ知らない宇宙があるのかも知れませんが、「　対消滅してエネルギーに戻る　」ことを想定して理論を組むことで、エネルギーを「　形　」にして組み入れて、対消滅をしていない現在の物理の理論を作っているのかも知れませんが、もし「　完全調和　」が「　神　」であるなら、上述の「　すべてが対消滅　」して、「　すべてがわからない　」のが正しいのかも知れません。

ですが、対消滅するエネルギー自体は存在しますので、「　一切皆空　」も、この世で生命を肯定する考えを育てますから、「　無　」も「　無限　」もエネルギーを持つ事に変わりがない（「　空　」の否定ではない）と思って、「　一切皆空　」を、現在の私は支持しています。

（v）「　空なる我　」を考えるときの実益

一つは、「　空なる我　」を原動力とした「　自我の変化　」が可能であることと、もう一つは「　一切皆空　」とすることによって「　エネルギー（神）の下で、万物が平等だということでしょう。

（Ａ）　前者は、人間は一度規定されたら終わりではなく、ブッダにもなれることで、自己の研鑽に役立つと思います。

（Ｂ）　後者は、不当に一方を上位としての「　いじめ」や「　差別　」の解消となると思います。

（Ｂ）　後者については、以下のように考えます。

私は、元公務員であっても、教職の仕事ではなく、一介の「　役人　」でした。

退職後、ひょんなことから「　空なる我　」を思いついたのですが、これを「　いじめ　」や「　差別　」の解消のために使えないだろうか？と考えました。

むろん、机上の空論で、文科省が平成２５年に作られた「　いじめ防止対策推進法　」などに資するとは思ってもいませんが、いくら法律で「　いじめ　」をする行為を取り締まっても、「　いじめる人　」の根底に、「　自分は他人とは違って優秀なんだ　」という「　自我　」が存在すれば、「　ただの法律　」に過ぎません。

その根底の「　自我の生成　」について、新天皇皇后も含めて日本国中の人が、そのいじめの「　縁起縁滅　」を考え、「　条件次第では自分もそうなる　」と考えた場合、少なくとも現在より優しい心になって、「　いじめ　」や障害を持つ人への思いやりなどが生まれ、仏教の「　慈悲　」の行為が、この世に現れるのではなかろうかと考えます。

私は、仏教の「　無我　」と申しますと、生きるための煩悩も何もかも捨てて「　自分の生命を否定する　」ような思いになるような気がして、「　生命　」そのものは自然の動植物のように純粋なエネルギーであり、その周りに巻き付けた過度の煩悩こそ、否定すべき煩悩だと思っています。

「　生命　」は、いじめる人もいじめられる人も持っていて、そのＤＮＡが持つエネルギーによる様々な違いが優劣となって現れているのを見て、「　あいつは、おれより劣る　」とか「　自分は、いつまでもいじめられるから、死んでこの世から去ろう　」などという「　生命　」に優劣をつけているのだと思います。

ですが、そのような考えをするのではなく、「　自分もあいつも、同じエネルギーの一つの現象なので、条件次第で変化する余地もあるんだ　」と考えるなら、「　自分はなぜ、あいつをいじめているんだろう　」という疑問から、自分を優位とする自分の煩悩に気づいて、能力の劣る相手を「　いじめる　」のではなく、互いの能力の違いを本人の責任にするのではなく、それぞれが与えられた能力で社会で果たすべき「　課題　」を発見できるのではないでしょうか？

自分も自然物も、（神仏）エネルギーのひとつの現象に過ぎず、これからも変化するのだと考えると、自分と自然との一体感が生まれ、自然に四季があるように、自分にも絶望の中に希望を見出せるし、同じ状況で困っている相手の希望を発見して励まし易いだろうし、その状況を自分の身に置き換えて考えることによって、気持ちや心を共感し、障害を持つ者への差別や人種差別も、現在より少なくなるかも知れません。

「　いじめ　」は私も、受けました。

私は、幼稚園から職場まで、いじめを感じ、それを打ち破って来たつもりですが、小学生が「　いじめ　」を受けで自殺して、遺書まで残して抗議しても、「　いじめ　」が一向に消滅しないのは、「　心　」に棲みつく自己中心的な「　自我　」を、いったんは、本来の「　我　」がもつ清らかなエネルギーである「　空なる我　」に戻して、それから育った「　今の自分の自我　」の良し悪しを、みんなで考えることがないからだと思います。

今の「　自我　」がわからないから、つまり自分がどんな煩悩で動いているのかを知らないから、弱肉強食という「　本能のまま　」で、今思っている自分の幸福のため、邪魔な相手を「　いじめ　」たり、あるいは自分の進路に絶望して、「　自殺　」するのではなかろうかと思うのです。

法律を作り、「　いじめ　」の行為を禁ずることは、見た目にも「　よくやってる　」という評価を得るでしょうが、「　いじめ　」を生んでいる「　自我の形成　」に盲目なのは、いかにも「　お役所仕事　」ではないでしょうか？

学校教育の中には「　道徳　」の時間もあるでしょうから、社会の約束事を教えるのも良いでしょうが、「　いじめ　」を作らないような「　心　」を作ることも「　教育　」であるだろうし、その「　心　」を育てるべき子の親や教職員が少ないから、相変わらず「　いじめ　」が起きたり、生徒が自殺するのではないでしょうか。

子は親の鏡とも申します。

子が知らないなら、まずは親から、その「　心　」をお育てになれば、子はそれを真似ると思います。

「　無我　」というのは、お釈迦様のお言葉ですから、それがすべての社会で通用する「　心　」だと思いますから、それから身につけると良いかも知れません。

親も学校の教職員も、子の教育者だと思います。

教育者は教育者として、「　いじめ　」の発生と、それを消滅させるため条件を考える、つまり、「　いじめの縁起縁滅　」を少しは真面目に考えたらどうかという、私の提案です。

（Ａ）　前者の「　自己研鑽　」ですが、「　空なる我　」になることを目標として、次のように思います。

Ａ－①　　＜空の考え＞

私は、これまで散々「　空なる我　」になったらどうか？と提案して来ましたが、それを、宇宙（自然）エネルギー（神）と生命エネルギー（仏）の習合としたことについては変わらないのですが、私は、私立大学の法学部を卒業し、物理などの理数系の考えには、とても追随することは出来ず、自分勝手に思っているだけですが、さすがにアインシュタイン氏の｛Ｅ＝ＭＣ²　｝という公式は、自分なりに知っていました。

長年、苦しんでいた「　色即是空　空即是色　」の単語の解釈として、仏教の教えとはまったく違って「　空　」は「　エネルギー　」であると置き換えてみますと、「　一切皆空　」はすべての世界は「　空　」、つまり「　エネルギー　」だと割り切って考えることが出来て、「　我　」というのは、「　無　」ではなく、私の生命ともいうべきで、それも「　空　」、つまり「　エネルギー　」ですから、私の生命は宇宙（自然）エネルギーと生命エネルギーがひとつになったもの（習合）と解釈しました。

ここで、その二つのエネルギーの習合が何がわからず、それを、またしても「　色即是空　空即是色　」の中に求めてしまいまして、現在は、次のように思っています。

「　空　」は「　エネルギー　」としましたが、「　色　」が実体というような考えもありますが、物質は、みんな色を持っているから実体というかも知れませんが、この「　色　」と認識させる力、あるいは世界を仮想現実とする力も、「生命エネルギー　」であり、人間が、無意識でも認識するものは「　生命エネルギー　」によるもので、一切がエネルギーであると考えるほうを、私は支持しています。

溶鉱炉の熱が炉の「　色　」でわかるように、エネルギー（力）が、現象となって人間の認識対象になるとき「　色　」は「　像　」であり、それはエネルギーの現象であるため変化すると考えると、エネルギーの変化が「　色　」でわかることになり、溶鉱炉の熱を宇宙（自然）エネルギーとして、熱によって炉が色彩を持って示している「　像　」を「　色（実体）」と考えると、（自然）エネルギーは現象によって、認識という「　生命エネルギー　」に反映するとすれば、「　空即是色　」が成り立ち、仮想現実といえど、その現実とはエネルギーであることになるのではないか？と考えて「　一切皆空　」を妥当とします。

当面は、宇宙（自然）エネルギーは、「　現象　」という「　形　」を通じて、生命エネルギーと結びつき、生命エネルギーは、それを維持するために「　現象　」（例えば、空気）を必須とすると思っています。

溶鉱炉の熱が炉の「　色　」でわかるように、エネルギー（力）が、現象となって人間の認識対象になるとき「　色　」は「　像　」であり、それはエネルギーの現象であるため変化すると考えると、エネルギーの変化が「　色　」でわかることになり、溶鉱炉の熱を宇宙（自然）エネルギーとして、熱によって炉が色彩を持って示している「　像　」を「　色（実体）」と考えると、（自然）エネルギーは現象によって、認識という「　生命エネルギー　」に反映するとすれば、「　空即是色　」が成り立ち、仮想現実といえど、その現実とはエネルギーであることになるのではないか？と考えて「　一切皆空　」を妥当とします。

当面は、宇宙（自然）エネルギーは、「　現象　」という「　形　」を通じて、生命エネルギーと結びつき、生命エネルギーは、それを維持するために「　現象　」（例えば、空気）を必須とすると思っています。

「　生命エネルギー　」の終焉は「　死　」という形の現象として現れますが、それは宇宙（自然）エネルギーを取り入れることによって新陳代謝をすることをやめることで、例えば呼吸をしない現象や、食べなくなった現象として現れ、それは人間という動物だけでなく、他の動物にも共通することで、人間もその他の動物と同じことを感じさせてくれると思います。

自然物を見ますと、小さな苗木が年輪を刻んで成長するように、大地から養分を吸い上げて自分の幹に巻き付けるというような、あるいは台風が周りの水蒸気を集めたり、惑星が磁場を持つように、（神仏）エネルギーの習合である「　空なる我　」のまわりに、本能という煩悩で自分に都合がよくて、合理的なものを引き付けて、「　色（自分）　」という実体にしたが、その「　空たる我　」というエネルギーの現象だと思うのです。

自分が好きで集めた、心も含む集合体が、「　自我　」という、ぼんやりとした存在感であり、それを形にしたのが「　像　」であれば、その「　像　」は「　空なる我　」の変化によって、「　像　」の姿形が変わるだろうし、進化のためには変わってほしいという気持ちもあります。

また、宇宙（自然）エネルギーは「　不安定　」から「　安定　」へ、「　規則正しい　」から「　不規則　」にと流れるものということを聴きましたが、そもそも「　安定　」とか「　規則　」というのは、生命エネルギー維持のため、人間が勝手に「　安定　」や「　規則　」を決めただけで、本来は「　不規則　」というより、空間に万遍なく広がって、宇宙の法則に従っているのであり、人間ごときが考えた「　規則　」などは、超えたものかも知れないから、新たな規則や法則を人間が発見できる余地があるかも知れないと思います。

エントロピーの知識があると良いのですが、宇宙の構成物は、無秩序で、バラバラであり、例えばプラズマ宇宙論のように、強烈な電流がフィラメントを流れて、磁場を発生させ無秩序な物質を、規則正しく一定の方向に組織したのかも知れず、人間の頭脳も大きく考えると、このプラズマ宇宙論などという考えで説明がつくのかも知れません。

それは、理系のこれからの人に期待するのですが、「　シンプル　イズ　ベスト　」と申しますように、単に相対論と量子論を統合させただけでなく、人間の頭脳も解明できるほどの、もっとシンプルな理論があるかも知れません。

時代の流れで変わる客観性や合理性と「　真実　」は違うと思いますから.....。

私は、「　一切皆空　」から、「　我　」も「　空（kuu）」として（神仏）エネルギーの習合としました。

「　無　」は「　空　」とは違って、思考上のもので、「　無　」を思考上で「　０（ゼロ）」とし、「　数えきれない数　」を「　無限　」としたのは、開発未開地の人にとっては、両方とも「　数えきれない　」という点で同じで、現代人が数学を成立させるために「　０（ゼロ）」や「　無限大　」「　無限小　」を作ったと、私は思います。

ネット情報ですが、それらは「　実在論　」と関係しているらしいですが、私の考えでは「　色即是空　空即是色　」の世界で考えまして、頭脳に現れる数字も含めて「　実在　」と呼ばれるものは、「　エネルギーの現象　」であり、その「　現象　」を数えるために数学があるのであって、私が「　神　」と考えるエネルギーのひとつの現象に過ぎず、絶えず「　縁起縁滅　」を繰り返す「　実在　」を前提にして、数学が成り立つものとは思えません。

これは、コンピュータが、革命的な数学を作れないことの証明にもなるでしょう。

「　神　」であるエネルギーを「　物自体　」と考えて生命エネルギーが認識する際に、空間と時間の「　形式　」を取るのに合わせて、「　物自体　」が「　現象　」としてあらわれ、それを「　ひとつ、ふたつ　」と数えるのが数学で、それは観念であるが、「　空即是色　」に従ってエネルギーが認識に現れたものであり、純粋に観念とはいえないという考えで数学を成立させることになり、結局のところ私は良く知りませんが、「　カント哲学　」が妥当ではないのかと思います。

私は「　一切皆空　」ですから、「　時間　」も「　空間　」という観念も「　空　」、つまりエネルギーであって（生命エネルギー）宇宙（自然）エネルギーの現象を頭脳の中の観念というエネルギーに転換するもので、両エネルギーは互いに補完するものだと思いまして、それだからこそ、理論の進展も期待することが出来ると思います。

「　数えられない　」のは、「　まだ現象として現れない　」（ゼロ）と、「　数えきれない現象がある　」（無限）と似たような思考で、その実は、物理などでいう「　対消滅　」しているために「　現象　」として現れないだけで、「　ゼロ　」と「　無限　」の中身は同じで、人間の思考には及ばないところにあるので、「　人間の中に無限がある（アインシュタイン氏）」かもしれず、それが仏教でいう「　無明　」であるかも知れないと思っています。

昔のゼノンのパラドックスも、運動がエネルギーであり運動しているように見えるのも、「　実在　」は「　神　」たるエネルギーのひとつの現象であり、この世は「　無常　」ですから、常に一定に続く実在はなく、「　縁起縁滅　」で、「　形　」を変えて別の「　実在　」となってエネルギーが存在するかも知れません。

こうして、人は「　無明　」から「　無明　」へと「　形　」は消滅するでしょうが、エネルギー保存の原則が正しければ、地球上からのエネルギーは他の動植物の命に転化するかも知れません。

昔の悟られた僧侶は「　無明　」がお嫌いのようですが、「　無明　」をエネルギーと考えると、エネルギーから出てエネルギーに回帰するのですから、私には、悲しいことのようには思えません。

Ａ－②　＜無に対する現象を考える＞

私は、上述のように「　無　」は「　無限　」と似たような考えをするように書きました。

宇宙の始まりがビッグバンでしたら、その前にも宇宙はあるという考えもお有りでしょうが、やはり「　無　」だと想像され、突然、ダークマターなどいう不明な物質から、ダークエネルギーが大爆発して宇宙になったと考えますと、Ｅ＝ＭＣ²　の公式が当てはまると仮定して、そのエネルギー（Ｅ）が宇宙の物質（Ｍ）の「　形　」に代わり、光（Ｃ）の速度で広がっていると考えますなら、エネルギー保存の法則で宇宙そのものがエネルギー（Ｅ）の「　からだ　」であり、エネルギーを「　神　」と仮定しますと、人間の細胞の中の「　空間　」もすべて、「　神　」たるエネルギーの「　からだ　」で、エネルギー（神）はその空間の中を光速で自由自在に推移すると思われます。

想像上の「　無　」から、宇宙という「　有　」を創ったのがエネルギー（神）であり、なんだか昔に聞かされたことの再確認となりますが、全然、前に進んだ考えではないように思いますが、仕方ありません。

この「　無　」というのは、完全対称で対消滅する世界であり、エネルギー（神）を内皮したものであって、完全対称性の崩れが「　有　」であり、エネルギー（神）の誕生であれば、「　無　」を認める限り「　神は存在する　」ことになり、エネルギー（神）は「　無　」ではなく、「　有　」を創る力であり、その「　有　」とは何であるのかと考えると、「　エネルギーが物質という現象に代わっている姿形　」であり、「　色即是空　空即是色　」の呪文と一致するという「　我田引水的な考え　」になります。

「　一切皆空　」で、この世がすべて「　空（kuu）」というエネルギーであるから、「　無　」という形から「　有　」に形が変わってもエネルギーは変わらないし、その「　有　」とは「　エネルギーのひとつの現象　」と考えますと、プラズマ宇宙論のように、人間も他の動植物も宇宙の物質で構成されていて、その生命エネルギーのＤＮＡという「　フィラメント　」の違いで、宇宙物質を中心に引き付け、様々な生物を構成しているのかも知れません。

引き付ける物質によって「　太陽系　」を含む銀河系を構成し、地球がなぜ回るのかが太陽系が創られた惰性であるとすれば、地球の生物がＤＮＡによって子孫が続くのも惰性かも知れません。

そんな「　系　」が違うのは、「　自我　」とも思われまして、自分は「　太陽系　」が宇宙の中心だと思うのは自己中心的な思いこみであって、太陽と地球が引力で結ばれているように、自分の煩悩のエネルギーで、自分が好き勝手に物質を収集しているだけで、引力がなければ太陽系が成立しないように、煩悩が無ければ生きることも出来ないので、煩悩を完全否定しても生きるエネルギー（神）を失うしかなく、ミイラになることは、エネルギー（神）を失うことで、宇宙（自然）エネルギーには戻るのでしょうが、人間は死んだら皆、それに戻ると思いますから、仏教でいう「　即身成仏　」はミイラになるのではなく、「　自我を滅して、エネルギー（神）である空なる我になれ　」ということであり、その目的は、顕教の最澄がいったように、「　忘我他利　」であり、社会に貢献しろということではないでしょうか？

自己を放棄することによって、他を利することであり、希望を与えることをすることでしょう。

様々な物質や生物に、己を構成するために物質を引き付けるエネルギー（神）があるように、「　形　」はエネルギー（神）が働いた姿形であり、「　現象　」であり、「　万物は流転し　」それは「　無限　」という完全対称な世界に戻るのかも知れません。

人間は非対称な顔つきや内臓を持ち、すべてが違う「　個性　」という「　エネルギーが働いている姿　」を持っているのは、「　人間の中に神が存在していること　」であり、その「　神　」とは宇宙（自然）エネルギーと生命エネルギーの習合である「　空なる我　」であることが、私の現在の到達点で、そこに戻らないと人類愛などというものは、生まれないと思っています。

Ａ－③　＜現象の活かし方＞

前回は、「　現象　」についての私の考えを書きました。

私は、それを人生の中で、どのように活かすのかを考えなくてはいけません。

「　現象　」というのは、何か見えない物が見える物の「　形　」になったと考え、私は「　空なる我　」を中心に据えていますから、その「　空なる我　」が「　形　」を変えて、見える物として現出するものを「　現象　」と考えます（空即是色）。

その集合体が「　自我　」であり、全体が「　現象　」であると考えます。

私は、宇宙（自然）エネルギーは皆さんと同じでしょうから、各々が相違するというＤＮＡのような生命エネルギーが現出したのが行為や態度、あるいはブログなどの著作だと思います。

台風なども「　現象　」で、その「　縁起縁滅　」が客観的なデータなどとして分かれば、その規模や進行方向などの予測が可能になって、防災に役立つと思いますが、「　自我　」という「　現象　」はどうでしょう？

何を集めて「　自我　」を形成するのか（例えば、趣味で盆栽を集めるなど）を通して、その人の「　空なる我　」が見え、それが歪んでいるか否かは、収集物で判断することになるでしょう。

私は、エネルギーを推察することによって「　形　」を予想され、防止策も立てられましょうが、経験したことがないエネルギーや予想がはずれた場合、例えば、津波が原発を襲った場合は、予想とは違った「　形　」で、エネルギーは他の自然エネルギーになりますから、「　縁起縁滅　」も事後でしか分からず、事例として残し、後世の人に「　縁起縁滅　」を頼むしか仕方ないと思います。

私の場合も「　空なる我　」のエネルギーが解らず、その進行方向についても不明で、どこに連れて行かれるのやら心配で、私がここに書いた物が、どんな歪みとして評価を受けるかわかりません。

「　自我　」を否定して「　無我　」になったとしても、その人が死後に残した著作た収集物は、地球の表面の殻のように「　自我　」を形成した「　形　」として残り、「　空なる我　」が自分には分からないから煩悩によって収集したもの（現象）を通して、自分には見えない「　空なる我　」を推察し、その進むと予想されるのが望ましい方向に煩悩を使って自分が好む「　自我　」を形成するだろうと思います。

「　行動しながら考える　」とか試行錯誤などは、その例で、行為や「　形　」から「　悟り　」へ進むのも同じことではないのかと思います。

スティーブ・ジョブズ氏が、当初は直観に任せて「　点　」を作り、あとからストーリを書くのは、当初からストーリの行き先が解っているからと申されたと思いますが、私の考えでは、彼がしたのは「　この事　」で、そうすることによって「　空なる我　」を、そのまま現出させる事が出来るだろうし、死後に彼が残した物が、彼の「　自我　」の殻であることになります。

生命エネルギーの終焉によりそれが「　形　」に残されたのが、その人の著作などの作品や知識だと考えますと、そのような殻は、その人の「　自我　」であり煩悩も残存していると思いますから、殻である著作を持って、その人と同じ「　自我　」を形成したいと思っても、ＤＮＡにより殻を引き寄せた煩悩も違いますから、蛇の抜け殻を見て蛇の大きさを推し量る事は出来ても蛇が創れないように、アインシュタイン氏の頭脳を保管しても、アインシュタイン氏を創れないように、殻を幾ら集めても殻を作るエネルギーは創れず、「　一切皆空　」なんかではなく、虚無に襲われるのかも知れません。

しかし、エネルギーは「　神　」でして、創造物である人間が、人間を創造するエネルギーを作ることは出来ないと思います。

私は、その残された殻を後生大事に保管し、エネルギーの復活を夢見るのではなく、その殻の中から自分の「　空なる我　」が進む可能性の糧とすること、がその著作を活かす事ではないのかと思います。

「　お経　」も「　聖書　」も同じで、持つ事に意味があるのではなく、その教えに従って生活する事が、それらを活かす事ではないでしょうか？

「　一切皆空　」ですから、著作も「　空　」というエネルギーを内部に秘めた「　無　」であり、そのエネルギーを「現象　」として、この世に現出させることが、「　無　」から「　有　」を取り出す事（空即是色）であると思います。

有名作家の「　現象　」とか「　ブーム　」が報道されることがありますが、有名である事や客観的である事は、「　真実　」を保障しません。

何様の「　現象　」になっても自由と思いますが、人生は自分だけのものですから、自分が選択した点の間違いは、その先の「　大きな間違い　」となって、回復が大変なことになるかも知れません。

ちょうど、安全神話で騙された福島原発事故のように.....。

Ａ－④空なる我の実益

私は、これまで書いて来ましたように、「　無我　」というお釈迦様の考えではなく「　空なる我　」と呼んで、宇宙（自然）エネルギー（神）と生命エネルギー（仏）の習合で、ちょうど太陽や地球の引力や物質を結合せるようなエネルギーであると考え、そのエネルギーは引き付けた集合体が「　自我　」であり、それはエネルギーがひとつの眼に見える現象となったものであり、エネルギーを「　空（kuu）」とし、現象を物質と同一視して「　色（siki）」としました（空即是色）。

「　無我　」と言われると、私という生命体自体が否定されるように感じて、母親の胎内にひとつにエネルギーを秘めた種が宿るというように考えて、「　一切皆空　」の考えも加味して、「　無我　」をエネルギーである「　空なる我　」と置き換えて、上記のようなエネルギーが私の内部にあると考えました。

私は、自分も自然の中の、エネルギーの一つの現象で、それは皆さんも同じで、現象であるからこそ「　縁起縁滅　」というように、条件しだいで、これから違った形の現象にもなれる可能性を持っていると言うだけです。

これは、生きとし生けるものの中にあるのであって、ひとつの細胞の死から新たな細胞が生まれる「　新陳代謝　」という特徴があるもので、ＤＮＡに違いによって本能（能力）が違い、セミはセミ、トンボはトンボ、人間は人間と、ＤＮＡの通り、エネルギーが尽きるまで生き続けなさいという使命を果たすまで、ネコもイヌもライオンも生きれるだけ生きるのであって自殺をしたなんて、聞いたこともありません。

自殺するのは人間だけですが、他の動物とは違って「　意識　」を持つのは、動物が出来ない自殺するためですか？

Ｅ＝ＭＣ²などという考えは、原爆を作ることもできましたが、同時に科学の進歩に多くの貢献をしたと思います。

「　意識　」の使いかたで、自殺も出来ますが、社会に貢献することも出来ると思います。

「　人間だけ自殺することが出来る　」というのは、人間としての誇りなどではなく、人間が他の動物がしない生きるという使命からはずれた事をする劣った動物であり、苦しくなったら使命なんかに構わずすぐ逃げ出す動物であることを示すことだと思います。

自殺以外に、「　死ぬ気になって　」することがあるのではないですか？

自殺したくても出来ない障害を持つ人や病人もいますが、その身を引き受けて生きようとしてる人に、なんと言うのですか？

「　羨ましいだろう　」とでも言うのですか？

引き付けるエネルギーを「　空なる我　」から発するのは、宇宙（自然）エネルギー（神）の下では平等でしょうから、ＤＮＡという生命エネルギーの種類や大小で引き付けるエネルギーと、引き付けられる物質も決まると思いますが、頭脳明晰や美人とかいっても、時の流れと共に色あせてゆき（無常）、毎年毎年、首席卒業者が排出され、絶えず技術も変わります（無常）しその人が皆、偉人でもありませんので、ＤＮＡの優劣は、人間としての優劣でないことは、いうまでもありません。

私は科学者ではありませんから、重力に関して重力子などという粒子の必要性の存否は知りませんが、昔、アインシュタイン氏は重力はエネルギーによる空間の歪みだとしたことを覚えていますので、私は、氏に従って、「　空たる我　」による歪み、中でも生命エネルギーによる歪みだと仮定します。

他の動物のような生命エネルギーでしたら動物らしくない歪みはないと思いますが、やはり先ほど申しました、自殺を企てる意識をもつのが人間で、特定の線を力線と思うような生命エネルギーの現象である意識による認識の歪みがあるのかも知れません。

生命エネルギーの中でも、お釈迦様がいう「　三毒の煩悩　」が一番先に思われますが、それを生むのも快楽を求める衝動・本能であり、それが現れる場面を「　空間　」とし、その「　空間　」を歪めるものが、先ほどの煩悩だと仮定しますと、「　空間　」を担当する右脳は同時に感情も担当しますから、危険度や好き嫌いも「　空間　」の中で同時に働いて認識を歪めて、衝動のまま近くに引き付ける事になり、本来は清涼な「　空なる我　」の周りに、自己中心の自分が好きな物（無意識な可能性）だけを引きつけた「　自我　」になるのだと思います（空即是色）。

しかし、「　自我　」を現象だと考えると、それを分析すれば煩悩というエネルギーが見えると思います（色即是空）。

あるいは、悟った人が私の「　空なる我　」を見て、「　歪んだ人　」と思うのかも知れません。

現象は「　空　」ですから（色即是空）、煩悩に塗れた「　自我　」という「　空　」を、清涼な「　空　」に変えることで、現象も変わると思います（空即是色）。

ネットで、悟るために修行するのが悟ることだという考えもありますように、煩悩というエネルギーが尽きることがない（無無明尽）ですから、生きている限り、悟る努力をすべきなのかも知れません。

「　自分も自然の中のひとつの現象で、条件しだいで相手の様な境遇にもなるが、他人も自分と同様なんだ　」と考えると、自分が嫌と思うことはせず、自分がされると気持ちの良いように他人にすると良いことがわかり、動物にも自然物にも、やさしい気持ちになって、いじめや差別も無くなると思うのです。

こんな私の考えが間違いなのか流行らないのか、遺書も残さず自殺に走る中学生が、絶えません。

Ａ－⑤＜無に対する現象＞

以前、「　無　」や「　無限　」を「　ゼロ　」として、なぜその「　無　」から「　有　」が生じるかについて考えました。

その延長の考えです。

「　無　」や「　無限　」を「　数えきれない事　」という意味では同等として、なにを数えるのかは、人間の「　五蘊　」で感じる「　現象　」であるとして、その「　現象　」は「　エネルギー　」が「　形　」として現れた事象であり、人間などの生物は無論、すべての構成要素は同じで、それを結合させているのが「　エネルギー　」であり「　神　」であるとしました。

自分を突き詰めればエネルギーになるだろうし、物を突き詰めれば、それを結合させるエネルギーとなるでしょうし、それが「　色即是空　空即是色　」だと考えています。

その際、「　無　」から「　現象　」の「　有　」が生じるのは、完全な均衡（無限・無）から、偶然にも結合させる「　神　」の手違いで、対消滅するべき要素と違った要素が結び付いて、「　現象　」という「　有　」が生じるのではあるまいか？としました。

ちょうど、南部氏の「　対称性の崩れ　」のように。

そうであれば、この世の物質は、すべて「　神の手違い　」で生じたもので、その内実は、要素が衝突するエネルギーであるだろうとしますと、物質を生じさせた「　エネルギー（神）」は、この世の全部に広がっており、それが宇宙の温度かも知れません。

その他に、ダークエネルギーやダークマターがあるとしましてら、他にもエネルギー（神）が、おわすことになり、それが「　やおよろずの神　」であるかも知れません。

この世が、ダークエネルギーから発した違ったエネルギーが働いているのなら、それこそ「　やおよろずの神　」がおわす事になると思います。

さて、話は戻って、「　無　」とか「　有　」とかいうのは仮定の上での概念だけであり、経験できるのは、自分を動かしているエネルギーぐらいなものだとして、「　無　」が完全なエネルギーの均衡状態で、その均衡が、ある偶然で破れたとき認識可能な「　現象　」で、それを「　有　」としますと、実験室での手違いなどによって偶然に発見されたものがノーベル賞になったケースを考えますと、当時の世間では間違った手順なのに、それが、結び付ける「　神　」の眼からは「　正当　」であるように、失敗の積み重ねで「　正当　」になることもあり、人間の手で「　現象　」を作れるかも知れないと思ってしまいます。

「　藤井聡太七段のＡＩ超えの手　」のように、人工知能から「　不可　」と言われているにも関わらず、人工知能のその時の判断が間違ったケースなど、社会で「　客観的　」で「　合理的　」なものは「　真実　」を保障せず、当時の人間の思考を満足させるだけですが、人間そのものも、「　神の手違い　」であれば、その評価も「　真実　」でないことは明らかでしょう。

ある「　現象　」に遭遇し、それまでの概念で、不条理や矛盾という言葉を添付して「　諦めること　」はせず、社会一般での「　客観的　」や「　合理的　」という評価を気にせず、自分のＤＮＡに従って行動すれば、「　後悔　」も少ないのではないかと思います。

（宇宙が膨張しているか、縮小しているかについてアインシュタイン氏が躊躇したように）

その「　不条理　」や「　矛盾　」がなぜなのかを後世に残して、その不条理を包摂する考えこそ「　真実　」に近づけるもので、今、生きている時代に、出来るだけの「　オリジナル　」な構成物を後世に残すという意味で、「　芸術　」や「　逆説　」を作る意味があるだろうと思います。

社会的には批判も多いでしょうが、数多くの「　逆説　」を残すことも、後世のためになるかも知れません。

（ちょうど、「色即是空　空即是色」という言葉のように）

私は、これまで書きましたように、私立の法学部卒であり、その他の分野には疎いのですが、「　成り行き上　」、よその分野に踏み込まざるを得ません。

数学者でも哲学者でも僧侶でもありませんが、前回に書きました「　無　」から認識可能な「　現象　」が「　有　」として数えられて、その行き着くところが「　無限　」であろうというのを、「　一切皆空　」や「　色即是空　空即是色　」や「　万物一如とする無分別智　」などから、現在、生存中の私の考えを書いてみます。

私は、「　一切皆空　」で「　空　」を「　エネルギー　」としますから、「　無　」も「　現象　」も「　有　」も「　無限　」も、「　エネルギー　」の元に成立する概念と考えて書きます（私の立場）。

「　無　」も「　無限　」も「　数えきれない　」という特徴があり、「　数える　」のは「　現象　」を主客対立にして、数字という符合、あるいは「　象徴　」をつけて、区別する事であり、それを「　分別する　」ということだろうと思います。

私の立場で考えると、「　無　」は認識不可能なエネルギーの完全な対称の「　形　」であり、「　現象　」は本質など他の概念の中で捉えるのではなく、文字通り「　象　」となって「　現れること　」であり、なにが「　象　」になるのかは「　エネルギー　」が何かの手違いで、人間が認識できる「　象　」（表象）となったのであり（空即是色・Ｅ＝ＭＣ^2）、その「　象　」（表象）を主観と客観で見て「区切って」、集めたのが加法で「　象　」が認識することが出来なくなったのが除法で、数えきれなく計算不能になった「　現象　」を「　無限　」だと考えまして、「　現象　」はいずれ「　空（エネルギー）」になる（色即是空）から全体の均衡がとれているのが宇宙だろうと、私はここで考えています。

まず区切ることが可能なのか？を問いますと、「　万物一如とする無分別智　」から見ると、ひとつを区切っても、もうひとつの間には「　無限　」の完全な対称があるかも知れませんから、「　一如　」であるのに「　区別　」によって「　無限　」を自らが「　作り出すこと　」で、それは人的加工されて有理数の間には「　無限　」の対称は存在しないと勝手に決めた約束事であり、別れたように「　現象　」させた神をも恐れぬ不届き者がすることで、数字の発生源である「　現象　」は途切れることなく連続するから「　変化　」するのであり、「　有　」と「　無　」には、存在の「　形　」こそ違えど「　エネルギー　」は続いているから、数字は符合しか意味はなく、実物するという物も認識不能な「　空・エネルギー　」になり得て、常に同一でないことも考えられます。

「　実在　」すると仮定していても、エネルギーとしては「　実在　」すると思いますが、実在する一定の「　物　」という保障は無く（色即是空）、前提そのものが疑わしいと思います。

科学は数字と共に進歩したのだと思いますが、それ自体が「　砂上の楼閣　」でして、一定に実在すること自体が出来ません（無常）。

無常の上の構成物ですから、実物に適用すれば、既に変化した物に不変の公式を当てはめますから、狂うのは当然でして、確率でしか存在を把握できないのは、存在自体が絶えず変化するから当然であり、確率は「　蓋然性　」であり「　必然　」ではないところに、不条理を捨てた合理性を感じます。

「　生死一如　」と申しますが、これも「　無　」と「　現象　」と同じく、神（エネルギー）の偶然の結びつきの「　形　」が誕生であり、その「　現象　」という「　形　」が崩れるときを「　死　」としますなら、「　誕生　」も「　死　」も、人間の認識可能な「　現象　」の「　形　」の「　生滅　」に過ぎず、流れるエネルギーは流れ来て、流れ去るものですが、その行き先は、同じエネルギーである「　無　」や「　無限　」の世界、それを「　無明　」といって生前は恐れますが、死後は「　無明　」という「　エネルギー　」の中に回帰するのだと思います。

ですから、人間界に聖者の再来も期待することが出来ると思います。

私の死後は、トンボやミミズや犬や猫や馬や牛など、生命がある物に転生したいと思って見ますと、動物たちが、いかに人間より「　悟っている　」のかを感じますし、彼らの生命が短いのも生命を与えた仏の慈悲でして、短い生を終えた死後は再び転生して、あなたの隣人になって、１００歳までの長寿な老人になったり、学者や聖者に生まれ変わる可能性もあると思いますので、怖くはありません。

より良き人生を全うし、死ぬときは死ぬと、思うように心がけています。

「　散る桜　残る桜も　散る桜　」と昔の人はいいました。

私は人間、あなたも人間。私は死んでゆきますが、あなたも同じく死んでしまうのです。どんな人間も、状況は同じなのです。

同じ人間として、いじめをやめましょう。差別をやめましょう。自殺をやめましょう。戦争をやめましょう。

Ａ－⑥　（Ａ）と（Ｂ）の合計

これまで書いて来て、少しだけ整理を出来ないものかと考えました。

私の考えでは、「　私　」は仏教の「　無我　」を「　空なる我　」として（神仏）エネルギーの集まりとしての「　我　」を認めまして、その周りに煩悩によって引き付けたものを「　自我　」としまして、「　自我　」を認めることは「　不安　」を認めることであり、その「　自我　」を本来の清らかな「　空なる我　」にもどすために宇宙（自然）エネルギーに頼る（ちょうど、呼吸して血液を綺麗にするように）と考え、ヨーガや山岳信仰などをその例として、「　安定　」に向かうのだと思います。

「　無　」である完全な均衡したエネルギーから偶然に飛び出した宇宙（自然）エネルギーが異種の生命エネルギーと結びついた時点で「　不安定な均衡　」エネルギーになって「　均衡　」に向かうべく「　生きる力　」となる。

生命エネルギーの「　形　」の変化として、ＤＮＡに従って人間の本能を持った胎児という「　形　」の誕生という「　現象　」となって認識可能になった時点で、本能（生命エネルギー＝「　無明　」）が頭脳を作り出すと同時に、「　無明　」から来る「　不安　」という精神（意識）を持つ「　自我　」を生まれながらに持っているため、人間自体が、宇宙真理からほど遠いものとして誕生するのだと思います。

（神仏という）異種のエネルギーの結びつきによる不均衡から均衡へ向かうため「　（死に向かって）生きるエネルギー　」になり、「　死　」へ向かう段階である生老病死の段階で、異種のエネルギーの結びつきの「　空なる我　」に本能や煩悩（生命エネルギー＝「　無明　」）から来る「　不安　」を引き寄せて精神（意識）の「　自我　」を形成し、その「　不安　」が、生命エネルギーの終焉である「　死　」への段階の生老病死の「　自我　」の中での「　苦　」となり、「　自我　」を否定して「　無我　」にして「　苦　」を逃れるのが仏教で、「　自我　」から「　空なる我　」に還元するのが、私の考えで、それによって「　不安　」や「　苦　」を解消し、「　安心　」「　涅槃　」の状態の人が「　即身成仏　」であると思います。

（神仏という）異種のエネルギーの習合によって「　生きる　」ことは「　不安　」であり「　有　」であり不均衡であるため、（神仏）エネルギーが、それぞれ完全均衡状態の「　無　」へむかう「　形　」が「　死　」とするなら、「　死　」によって生命エネルギーは終焉しますが、宇宙（自然）エネルギーが完全均衡状態に戻るべき、均衡する対（つい・pair)ともゆうべきエネルギーから飛び出したもので、消滅する相手のエネルギーが存在しないまま宇宙に漂うか、あるいは他の生命エネルギーと結びついて「　現象　」となる場合があり、前者は宇宙空間に漂う気（ki)というエネルギーとなり、前述したヨーガや山岳信仰でエネルギーのボルテージを高めるだろうし、後者は、他の動物の誕生の「　形　」の輪廻の現象になるのではなかろうかと思います。

「　形を変えてもエネルギーは消滅しません　」から、形が「　誕生　」であろうと「　死　」であろうと、「　現象　」に変わっただけで、エネルギーは消滅しないと思います。

「　自我　」を否定して「　無我　」となることは、自然と同様な現象となることだと思いますが、自分の存在自体を否定するとも考えられますので、私は「　無我　」ではなく「　空なる我　」という（神仏）エネルギーの習合としました。

天気予報で天気を知り、降雨を避けるために傘を準備するなど、自然から受けるエネルギーをそのまま受けるだけではなく、避けることも出来るのが人間ですから、分別するので人間の構造から真理からほど遠く、自然とは違った行動をして、失敗も多いですが、時々、思いもかけない異種の組み合わせで自然より強いエネルギーを引き出すこともあり、それが人間だと思います。

エネルギー完全均衡が「　無　」で、その均衡を破った不均衡なエネルギーが「　有　」で、前者が「　死　」で後者が「　生　」を表すと考えるなら、「　生命体　」を考えると両者は混在し、エネルギーが現象となって「　安定　」しているものとエネルギーのまま「　不安定　」が同居し、「　有　」から「　無　」へ、「　生　」から「　死　」へと向かうが、前者は「　エネルギー　」で後者は「　現象　」で、現象である「　自我　」を現象になる前の「　無我　」にするのは、（漢字で「　我　」が両方に含まれているように、）「　心・気持ち　」である「　自我　」という「　象・現象　」の存在は否定するが、存在まで至らない「　我　」は否定していないと思われて、私は「　自我という現象が存在する前の我　」は、エネルギーであり「　空なる我　」として残ると考えました。

「　有　」から「　無　」へエネルギーが推移するのは、（Ｂ）密教の思想で「　色即是空　空即是色　」の世界、「　生　」から「　死　」という現象の変化は、認識可能な現象ですから（Ａ）の顕教の思想で「　縁起縁滅　」の世界であると考えます。

「　自我　」という「　象・現象　」を否定しますが、それは、「　自我　」が生来、含んでいる「　無明　」から来る「　不安　」を取り除くためであり、自分を喪失するのではなく、逆に、全ての能力を集結して「　無明　」を取り除いて、エネルギーの習合である清らかな「　空なる我　」にすること、「　智慧を得る事　」です。

「　無我　」は、煩悩の中で「　空なる我　」を模索することですが、「　無私　」は、自分の私利私欲を取り除くことで、「　自我　」をいったんは認めた上で、「　自我　」の煩悩が混じって歪んだ姿から、あるべき「　自我　」の処し方を模索することで、「　武士道　」などの道徳で「　滅私奉公　」といいますが、「　滅私　」といいますのは、自分の存在を否定するのではなく、私利私欲の無い事で、自分の事より他の人の事を思いやることで、まだ「　自我　」のあり方の範囲内の問題だと思います。

赤穂事件の大石内蔵助は、主君の遺恨を晴らすため、吉良邸に討ち入り、自分の身体を切腹という「　形　」で主君に恩を返したのですが、主君の遺恨が、吉良氏へと同時に「喧嘩両成敗」という武士の原則で裁かなった幕府への遺恨も、同時に果たすため、吉良氏を単に暗殺などで殺害するのではなく「　討ち入り　」の「　形　」で、幕府の誤りを認めさせるための行為であり、それが大石内蔵助の武士道だったと思います。

彼は、たまたま、自分の身体を「　滅した　」のですが、儒学の武士道は、主君のために己の身体を捨てよという規律ではなく、私利私欲を持つ事無く、忠実に主君に仕えよというだけで、切腹するのは主君のためではなく、自分の武士としての誇りを保つためだと思います。

（Ｃ）全ての宗教の「　神　」＝エネルギー＝「　空　」　？

「　無我　」を「　空なる我　」に置き換えて考えますので、無論、仏教ではなく、エネルギーを「　神　」としますので、同じようにみえる語句の使いかたや考え方をしますが、「　神　」を認めないと思われる仏教とは、まったく違う考えであり邪悪な考えと言われるかもしれません。

生物に共通な新陳代謝が、「　破壊の神　」とか「　創造の神　」などの「　神　」の働きではなく、異種の宇宙（自然）エネルギー　（神）と生命エネルギー（仏）が習合した（空なる我）の不均衡（生）から均衡（死）へ向かうとなり、生命エネルギーの本能（＝「　無明　」）の周りに、生命維持の自然エネルギーを引き付けた「　形　」として現れた（空即是色）のが「　誕生という形の現象　」であると考えます。

前者は完全な均衡の「　無　」を破ったエネルギーで、「　有　」を作り出す消滅する対（ペア）が無い不均衡なエネルギーであり、エネルギーが対（ペア）を求めて異種の生命エネルギーと結合して安定した「　現象　」の中に、他の対（ペア）を求める不安定なエネルギーとして含まれて、生命エネルギーが完全均衡になる「　死　」という「　形　」の現象に推移すると考えます。

私は、仏教者でもなく、キリスト教徒でもないのですが、この「　誕生　」や「　死　」を考えていましたら、最近、ユーチューブで日本語に翻訳された形で、聖書の内容だと思いますが、ヨハネとかルカとかいう福音書でキリストの誕生や死について語られる動画をみるようになりました。

これまでの私は、まったく聖書については知らなかったのですが、マリヤの処女懐妊などの話を聞きまして、男女間の性交がなければ妊娠や誕生は考えられないとして、信じる事はありませんでした。

私は、キリスト教がいう「　神　」も仏教と同じく「　エネルギー　」として考えられないかを頭に入れて、無謀にも、キリスト教の中に、「　色即是空　空即是色　」を導入して、キリスト教がいう「　神　」をエネルギーとして｛　Ｅ＝ＭＣ^2　｝として考えたいと思います。

以上のような私の解釈から書きますと、「　誕生　」は、宇宙（自然）エネルギーと生命エネルギーの習合が、母親の胎内に宿り、生命エネルギーの進達に応じて細胞分裂し、母親の胎内から胎児という「　形　」で人間が認識できる「　現象　」となって現れた（空即是色）のが「　誕生　」であり、生命エネルギーの終焉を迎えるのが、人間という現象が「　死　」という「　形　」をするもので、「　現象　」に中に潜んでいた宇宙（自然）エネルギーである気（ki）は、骨という物質や火葬にともなう臭気などの気体となって、宇宙空間に飛び出して循環するのだろうと思います（色即是空）。

私が信じなかった「　マリアの処女懐妊　」は生物的にみれば疑問なのですが、宇宙（自然）エネルギーは存在し、生命エネルギーを欠くのですが、その生命エネルギーが、何かの間違いで宇宙（自然）エネルギーがその代役をし、ＤＮＡは一般の生命エネルギーとは違って宇宙エネルギーのＤＮＡですから、人体や胎児という「　現象　」は同じように見えても、その「　空なる我　」は、純然たる宇宙（自然）エネルギーですので、人間は宇宙（自然）エネルギーと生命エネルギーの習合ですので、エネルギーである「　神　」にはなれず、「　神　」に近いブッダになれるくらいでしょう。

ですから、イエスが宇宙（自然）エネルギーだけが体内に働くのなら、人間とは違った「　奇跡　」といわれる事もできるかもしれません。

イエスのエネルギーは宇宙（自然）エネルギーと同質のものであり宇宙（自然）エネルギーそのものと同化していますから、彼の行為からは、宇宙（自然）エネルギーがあふれ出して来ることも考えられますし、彼の行動や彼の言葉はエネルギーそのもので、それらの中には、間違いがないどころか、福音書にもありますように予言も可能なのかも知れません。

彼が話す「　神　」の言葉は、「　無明で盲目のエネルギー　」が現象となったものですから、自然エネルギーが意思を持った状態で、私たち人間のように迷うこともなく、「　宇宙（自然）」の意思として語られ、イエスもご自分の言葉どおりの死を迎えられるのでしょう。

では、なぜ「　死　」を迎えるのかですが、宇宙（自然）エネルギーが生命エネルギーとなったとしても、生命エネルギーの衰退と同様に物質の変遷が起きて「　死　」という形をとると思いますが、習合しているのが宇宙（自然）エネルギーだけですので、輪廻転生することはないでしょう。

私は、人間が誕生から死後へと向かうことについては、全く恣意的な考えをしています。

宇宙（自然）エネルギーと生命エネルギーの習合したのが人間ですが、この宇宙（自然）エネルギーが如何にして生まれたかですが、「　無　」と「　現象　」を示す「　有　」ですが、完全均衡状態のエネルギーが何かの間違いでその対（ペア）となるぶきエネルギーから外れて、他のエネルギーと結びついて（いわば「　浮気　」のようなもの）、物質（浮気の結果の子供）が出来てしまい、「　安定　」し「　均衡　」しますが、宇宙（自然）エネルギーは、本来、安定し均衡すべき対（ペア）のエネルギの存在を欠いていますから、人体の中で安定しているように見えても、絶えず消滅すべき対（ペア）のエネルギーを求めていますから（例えば結婚しても浮気するように）に、人体の中で「　不安定　」を提供し、それが、新陳代謝の「　古い細胞を破壊する神　」となり、「　生きる原動力　」でもありますが「　死　」へと駆り立てるエネルギーにもなるんじゃなかろうかと思います。

ですから、キリスト教では「　神　」を「　父なる神　」と呼ばせ、自分の頭脳の中で「　創造　」を担当する神となり、不均衡から均衡へと動かせるゆえに創造の「　神　」の働きである「　創造　」を重視しているんじゃあないかと思います。

この世に「　破壊の神　」や「　創造の神　」がおわすのではなく、この世を構成する宇宙（自然）エネルギーが、そもそも「　無　」あるいは「　無限　」のエネルギーの対称の中から偶然にも飛び出して、他の受容体「　有　」なる「　現象　」を作り出すところから、それら二つの神の働きを持っている、即ち「　万物は流転する　」ことを可能にしているから、「　現象　」を次の「　現象　」に変えるのであり、「　無常　」を引き出しているのであり、この「　無常　」を感じることが「　神　」を感じることで、天災などに見舞われたときに、「　破壊する神　」を感じるのも、「　神の存在　」を確認する契機になるのかも知れません。

天災の被害を苦しむ人をみて、「　あれは、俺たちとは違う　」と、あざわらい、冷たく突き放すひとは、「　神　」を知らない人であり、その人こそ「　無宗教　」で享楽以外は何も持ち合わせていない動物のようなもので、「　神　」を信じる人であるとは思われません。

イエスの「　死　」でも、「　空なる我　」を構成していた生命エネルギーとして働いた宇宙（自然）エネルギーと純然たる宇宙エネルギーが宇宙に還流するのですから、イエスを構成していた「　空なる我　」は、消滅せず、人間にイエスの現象の残像とともに、生きているイエスを見た人の中に残るのでしょう。